

この島の男女の交際ほど、およそロマンチックらしからぬものはないでしょう。ほとんどの人たちは見合いと言うよりも、それぞれの親しい人からの推めで結ばれています。子供を育てるとか、将来の生計を考えなければならぬという事はなかったのですから、それほど真剣に考えなくても良かったのでしよう。私も夫との結婚は、見合いもせずに式を挙げました。別に見合いをしなくても、歩いて十五分か二十分足らずの療養所では、みんなが顔見知りで、その性格も人の噂等でおよそは解っています。女の部屋では雨が降って誰も遊びに来ない時などは、誰かの口切りで、男の人の品定めが行われる事は決してめずらしい事ではありません。

私が夫の事について最初に知ったのは、私の親しく出入りしている人の部屋で、丁度来合わせた彼に紹介されたのですが、その時彼は入園後二十日も経つのに未だ部屋が決まらなくて、收容所にいるとの事でした。私がその当時の事を後々まで憶えていたのは、私の知人が彼を指さしてこの島の療養所の韓国人について語った事が記憶に重たく残っていたからです。と言いますのは普通日本人僚友は收容されると一週間でそれぞれの寮へ入るのですが、私たち韓国人の場合は中々受取って貰えないのでつい日延べになって、彼の場合は二十五日目にやっと部屋が決まりました。新しい入園者があると患者自治会の人事係が各寮へ入居の交渉をするのですが、一旦入ったら特別の事のないかぎり、そこで一生共同生活をしなければなりませんので、その部屋の人たちは出来るだけ良い人をと希望するのです。

私の知人の言葉を彼はじっと聞いていましたが、それに軽くうなずいただけで、それ以上何んにも口を開きませんでした。かえってかすかに微笑をためていました。私の結婚について知人から推められた時、その相手が彼であることを思い出したのですが、一週間ばかり考えたあげく、私は彼と結ばれました。その頃の夫は病状も比較的軽症でしたし、私は人並の生活は出来るだろうという考えでした。

一旦ライと宣告されてたら、プロミン剤の出現はありましたが、私のように後遺症の残っている者は退園する事は出来ません。よほど早期に発見された人たちだけが社会へ帰れるのですが、その人たちに対しても世間の人たちはライに患ると忌み、嫌う事は少しも以前と変わりありませんので、ハンセン氏病と訣別する事は今日の社会情勢ではまだまだ無理な実状です。一日も早く大手を振って社会へ帰れる日が来る事をみんな望んでいます。

私は病状が固定して来たのと、それから世間で言う適齢期を迎えていたので、どちらか決めなければなりません。一つは社会へ帰る道ですが、これは先に書きましたようにほんの一部の人に限られていますし、又中々きびしい道です。が、私のように一応病状は固定したとは言うものの大きな後遺症の残っている者はもう一つの生き方、この島を永住の地と決めて結婚生活に入る事しか残されていません。私が発病したために母はすぐ下の弟を連れて私と三人で父や家族と別居しました。それは夜遁げ同様にして、誰も知らない土地へ移ったのですが、そこで私は塩酸を呑んで自殺を計ったものの死に切れずに、この島の療養所へ渡って来たのですから、若しかりに全快治癒したとしても一般社会へは帰る決心がつかなかったかも知れません。

私は毎日夫婦寮の人たちの生活を、見聞きしていましたから、結婚についての大きな期待は持っていませんでした。一寮八室の夫婦寮は左を向いても右を向いても、何んの変化もありません。一つの規格の中に二人の別々の人間が、その不幸な魂を寄せ合ってひっそりと暮らしているのです。来る日も来る日も何んの変化もない時間が連続して流れる、そんな単調な生活を続けながら、何時とはなしに人生を終るのです。しかし、それでも殺風景で、ギラギラした独身寮の生活よりは、うるおいがありますし、愛する自信があったらわずらわしい独身寮よりは、少しでも人間らしい生活が夫婦寮では出来るのではないかと考えたのです。

此の三月で、私は八回目の結婚記念日を迎えましたが、毎年その日はささやかな食膳を飾って、私たちはお互いの生命をたしかめ合っています。